（別紙1）

論文の内容の要旨

論文題目　柳田国男における歴史社会学の方法

氏　名　佐藤健二

本論文は、「柳田国男」が模索した文化研究の特質を、歴史社会学の方法という観点から分析し、その可能性を再構成したものである。日本民俗学の建設者として知られる柳田国男は、有賀喜左衛門や鈴木栄太郎、喜多野清一などを通じて、村落調査など社会学の経験的調査研究の誕生に影響力を及ぼした事実や、日本文化研究あるいは「民族的なるもの」への先駆的な研究を行ったことが、社会学でも言及される。しかしながら、社会学の理論研究や方法論の領域において、その研究の意義が明確な位置づけを得てきたとはいいがたい。理由の一つを構成しているのが、彼の著作の膨大さである。1960 年代からごく最近にいたるまで、柳田国男の思想を学ぼうとする研究者にとって基礎テクストとして利用されたのは『定本柳田国男集』（全 36 巻）である。収録されている研究の領域はじつに幅広く、農政学、農業経済、村落研究、都市論、国語論、文学史、昔話、方言、宗教学、家族論、民家研究、生活技術、世相論、風景論等々に及ぶ。しかしながら、かえってその関心領域の幅広さと残された著作の膨大さゆえに、評価はそれぞれの研究者の既存のディシプリンに囲いこまれ、また個別的断片的な利用に分断され、この歴史社会学者の達成を貫く方法の可能性は明確化されないままの状態にとどめられてきたといわざるをえない。本論文では、既存の柳田評価のいわば「下部構造」となってきた『定本』のテクスト空間を、徹底的に再検討し、テクストの総体のなかで根本的に組み直すことを通じて、その民間伝承論がもっていた〈書かれたもの〉の権力の上に築かれた歴史認識に対する批判力を発掘し、社会史すなわち歴史社会学の可能性を開いた方法を明らかにする。その作業はまた、今日の社会学的な解読実践のなかにも潜みうる〈自文化中心主義〉と〈現在中心主義〉とを相対化する契機となりうるものである。

本論文を通じて、著者が主張した主要な論点を要約すれば、以下のようにまとめることができる。

第一に、年表的な意味で現在と区別された過去の社会を研究対象とする社会学研究が、すべてここで論じている意味での、方法性を有する歴史社会学ではない。文化研究を「歴史社会学」として評価する規準として、①歴史遡及の現在性の自覚、②比較を通じた自覚的な脱領域性、③研究主体の立場性や研究実践の特権性への問いの三つを挙げ、異文化研究としての性格を明らかにした。第１の規準は、構築主義として論じられる方法的立場と深く共鳴していくと同時に、「史心」の育成や「郷土研究」の必要という柳田の論点とも結びついている。また第２の規準では、その比較の方法が単純な周圏論の評価などに止まらず人類学のフィールドワークにつながり、旅＝交通の力にまで及ぶ「史力」の育成でもあることを示し、また第３の規準が「社会学の社会学」という自己省察の自己言及と呼応していることが、多様な角度から述べられる。そのような意味において、まず柳田国男の研究は歴史社会学たりうるものであった。

第二に、既存の評価の暗黙の前提にすえられていた農政学／文学／民俗学の分断を、テクスト内在的に批判している。農政学の挫折すなわち民俗学の誕生という図式の誤りは、初期農政学の著作のなかにあらわれる主体概念の設定や、コミュニケーション形式の重視、『郷土研究』期における「ルーラル・エコノミー」批判などから明らかにすることができる。この分断・変容の図式はまた、農政学期の経済学的な批判のラディカリズムに対して、文化研究における「民族」概念の保守性への後退をことさらに強調する。しかし柳田の著作の出発点に、産業組合の結成の実務にかかわるハウツー書があったことの意味や、『時代ト農政』という著作がすべて講演体に書き直されていること及び初期著作のほとんどが通信教育のテクストであった事実などを重ね合わせて、後の『国語の将来』や方言研究批判のアクチュアリティを位置づける必要がある。むしろ日本における文化の不均等発展批判や分権論的思考の連続において民俗学誕生の意義をとらえる方が整合的である。

このことは第三に、いわゆる「民俗学」や「郷土研究」の現代的な受け止めかたの批判的再検討ともつながっている。植民地主義批判の興隆とともに、民間伝承への研究的な取り組みを、あらかじめ失われていた「日本的なるもの」の連続性と国民への統合を捏造したという断定において批判する評論が盛んになった。人類学における"Writing Culture"以降の方法論的内省とも関係しつつ、「民俗学の政治性」論のようなイデオロギー批判はさらに記述の実践そのものの政治的効果を鋭く問うところへと進出し、既存の歴史認識に対抗しようとしてきた調査戦略そのものを、権力作用として批判する論理が輸入されはじめている。すなわち、「いくつもの日本」に向けて多義性を追究したはずの民俗学が、じつは共通性探しの「一国民俗学」でしかなかったという物語が前景にクローズアップされ、「国民国家」の啓蒙のプロジェクトにすぎなかったという批判的言説の一つの型式が確立していく。しかし、これらの言説批判は、それぞれの研究実践を審査する規準ともなるであろう郷土研究の理念が、①歴史の私有囲いこみに対立し抵抗する共有の実践として、それぞれの主体の資料批判力にわりあてられているというメカニズムをとらえておらず、また②資料や観察における批判力の共有を、雑誌というメディアの広場への参加を通じて構築しようとした理想を見落としている。柳田の研究を学問運動としてとらえる視角が弱いのである。

第四に、以上のような柳田国男の可能性の読み直しをさらに図式化すれば、〈伝承／常民モデル〉から〈テクスト／読者モデル〉へのパラダイム転換を論ずることになる。この論点はまた、メディア論の積極的な導入でもある。メディア概念の応用は、しばしばそのメディアが運び伝える情報の「内

容」でのみとらえられ、メディアそれ自体の社会的形態、すなわちテクノロジーの「形式」としてはほとんど論じられてこなかった。「柳田国男」の思想と方法の理解でも、メディアとしての書物の果たした役割は、あまり重要には思われていない。しかし、その方法の形成にとって、書物という「書かれたもの」で「複製されたもの」がつくりあげた知の形式と、読書の身体的な経験とは、まちがいなく本質的なものであることを、その回想や著作のなかに現れる論述から明らかにした。①書かれたものの集積のもつ意味、②引用の網の目の発見と伝承へのまなざし、③索引というテクノロジーへの注目、④声の発見、⑤権力によって書かれたものの考察、⑥書物のもつ政治力の自覚などの論点は、〈テクスト／読者モデル〉を採用することで、より明確化するだろう。すなわち柳田国男が構想した新しい学問は、写本や刊本を核に習俗や身ぶりにまで拡がる〈書きこまれたもの〉の蓄積がもつ装置性と、そのなかを生きる読者という主体性とが作り上げる「読書空間」の考察において、より明晰に把握することができるのである。

第五に、民俗学と文学とをつなぐ新語論の戦略的な位置づけもまた、本論文がはじめて柳田国男の解釈につけくわえた視角である。「伝達」の手段＝媒体としてだけでなく「思考」の手段＝媒体としても重要な「ことば」への深い関心は、柳田の学問的営為の中心に置かれたもので、一方における国語すなわち近代日本語批判と新語論の重視は、歴史社会学の方法にかかわる重要な論点である。名詞形の増加と固有の動詞・形容詞の不足にみられるような言語蓄積の変容と、総動員型のコミュニケーションにおける身体感覚との抑圧とを、柳田は近代日本語批判において関連づけていく。と同時に、新語の新しさがそれを聞いて楽しむ集団の承認に依存し、「新語不発生の事実」を文化の中央集権に結びつけて批判する読解、さらにはことば以前の「泣く」行為を満たしている身体感覚に解読を深めていくプロセスは、柳田の方法的な立場が失われた古きをたずねるタイプの民俗学ではなく、現在する「問題」を規定している制度や条件の布置を、時間的重層の厚みにおいて問う歴史社会学であることを物語っている。

第六に、印刷物が生み出した近代読書空間の拡大として柳田国男の方法の核をとらえる本論文の基本的な姿勢は、社会学方法論の領域における資料空間構築の重要性という歴史社会学の方法のもう一つの側面と密接に結びついている。われわれが「社会」と呼んでいる空間それ自体がテクストの織物である。社会それ自体が、記録媒体の集積であって、たとえば土地に、道に、住居に、墓所に、風景に、災害に、事件現場に、関係的存在としての人間の実践の痕跡が記録されている。身体もまた、重要な記憶媒体である。そしていうまでもなく、ドキュメント（文書）も、書物も、写真も、新聞も、統計も、社会という記録媒体の組織的な一部分である。その意味では、「資料空間」の外延はわれわれが生きている社会の縁と重なる。そこに刻まれたテクストもまた、あるいはかすれ、重ね書きされていて読みにくく、古文書を読む経験を蓄積し共有してきた歴史学と同じような資料学へと向かう想像力と考証力とが必要になる。そして「読書空間」における「読者の批判力」のありようは、「資料空間」における「リテラシー」の位相と対応している。その問題を「柳田国男」というテクストの集積それ自体の再編成と新しい解釈の生産との関係としてとらえなおしたのが、新しい全集の編集方針の立ち上げをめぐる考察である。ここで論じられている時系列配列の意味や、テクスト概念の拡大、テクストの形式分類の意義、著者概念への疑い等々は、文献学的な主題である以上に、社会学的な資料批判の課題であることが明らかにされている。